

## 幼稚園における三年保育教育課程設定の一試案

金丸忠義\* ・池田一徳\*\* ・鈴木康平\*\*\*  
坂崎喜久子\* ・高並靖子\* ・石川由里子\*  
荒木幸子\* ・大塚桂子\* ・三戸理恵子\*

### Three-year-course Tentative Curriculum for Kindergarten Children's Education

Tadayoshi KANEMARU, Kazunori IKEDA, Kouhei SUZUKI  
Kikuko SAKAZAKI, Yasuko TAKANAMI, Yuriko ISHIKAWA  
Sachiko ARAKI, Keiko OHTSUKA, and Rieko MITO

(Received October 2, 1989)

We have engaged in building up the new curriculum for Kindergarten children's education, especially for three-year-nursing course education. Until several years ago, we continued to bring up children under rather traditional type of curriculum laying emphasis on parents' and teachers' strong desires in children's education. Just three years ago, we were requested from the Ministry of Education to create some new curriculum for the three-year-course of children's education. Availing ourselves of the opportunity, we decided to look over the traditional curriculum and to find out some vices of it. We have been very eager to look at our children's daily lives in our Kindergarten again in order to get much more information from our children's behavior. Through longitudinal and participant observation, we become aware of their own developing abilities, tenderness, and their own unique personalities. Now we could present our tentative curriculum for three-year-course children's education.

#### 問 題

幼稚園教育について、学校教育法では、「幼稚園は、幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする。」と、示されている。また、わが国幼児教育の基礎を築いたとされる倉橋惣三は、その著書『幼稚園真諦』(1934)の中で、「幼稚園とは幼児の生活が、その自己充実力を充分発揮し得る設備とそれに必要な自己の生活活動のできる場所である」と述べ、さらに、保育のあり方、保育者の役目として具体的に「幼児の生活を尊重してその生活に向かってこちらから教育を持っていく」「一人一人の子どもから方法がうまれてくる」そして、それらのことをまとめ幼稚園の保育のあり方としては「幼児のさながらの生活→自己充実→充実指導→誘導→教導」となることが望ましいと述べて

いる。すなわち、幼稚園の教育というのは、大人の側から一方的に目的を持ち、それに子どもを近づけようとひっぱるのではなく、子どもとそれを取り巻く環境を大切に、大人の方から子どもに近づくことの中にこそ大切なことがひそんでいるのであるといえる。

しかし、保育の現場をしてみると、小学校の教科をそのままやさしくおろしてきたような時間割保育をしたり、親の側のいわば大人の都合からだけとも思われる要求や希望に応じて早教育に走り、幼稚園が早期の学習塾に化しているといった傾向にあり、子どもにとって果してふさわしい園生活が展開されているかどうか疑わしい現状が見られる(昭和58年の中央教育審議会の審議の中でも、このことが指摘されている)。

本園では、昭和50年代半ばまで倉橋のいう幼稚園教育の姿を十分に考慮にいれながら、子ども一人一人の自発性を重んじた保育を展開し、実践研究を進めてきたつもりであった。しかし、昭和56年度から3歳児を受け入れたことにより、3年保育の教育課

\* 熊本大学教育学部附属幼稚園

\*\* 熊本大学教育学部保健体育学科(現 鹿屋体育大学)

\*\*\* 熊本大学教育学部心理学科

程を作成する必要に直面し、そのために3歳児の実態観察、4、5歳児の発達との比較検討等をくり返す中で、これまでの園生活のあり方そのものについて、また、その園生活のねらいや内容を表すこれまでの教育課程（本園では独自の考え方にたち、特に水準という名称にしていた）について様々な反省点や疑問点が出てきた。整理してみると次のような点である。

1. 子どもにとってふさわしい園生活はどのようにあるべきか（一日の暮らし、環境、保育者の役割）
2. 一人一人の発達の違いに応じられる教育課程はどのようにあればよいか。

このような点を明らかにすべく、研究テーマを「保育の見直し」と設定し、研究を進めていたところ、昭和61年度より3年間文部省の教育課程研究（研究テーマ「3年保育の教育課程について」）の指定を受けた。

そこで、これまでの教育課程を参考にしながらも、一人一人の子どもにとって、さながらの生活がより十分に展開できるような園生活のあり方はどのようなものであることが望ましいかを追求することとし、そのためには、保育者はどのような役割を果たせばよいのか、また、子どもの園生活の柱作りともいえる教育課程を新たに編成するにはどのようにすればよいかといった視点から研究を進めることとした。

具体的には、これまでの園生活のいろいろな場面を子どものサイドにたち、次のような点から見直すことにした。

1. 園生活のみなおし
  - (1) これまで繰り返してきた生活（いわば、これまでの教育課程に基づく展開）を振り返り、その生活場面の再吟味を通して何を育てたかったのだろうかということをはっきりさせる。
  - (2) 育てたいと願っていることが子どもに無理なく育っている場面をさぐる。
2. 一人一人にとってふさわしい生活が保障される教育課程設定に向けて
  - (1) 子どもの主体的な遊びの姿を観察し記録にとどめることにより、変化していく遊びを通して子どもの中に育つものをとらえる。
  - (2) 子ども一人一人の発達の特性や個人差のあらわれをとらえる。

以上のようなことを日々、個々の記録として、また保育の反省記録として残し、学期や年ごとにくくり（節目）を見つけていけば、そこから子どもの育

つ道筋が見えてくるのではないだろうかと考えた。

## 方 法

1. 園生活のみなおしに関する方法  
行動描写記録法：主としてVTR録画により、園生活の様々な場面における子どもの様子を観察しその実態をとらえる。
2. 「新しい教育課程設定に向けて」の方法  
記録したことを集積、整理することにより、週月、学期、年齢ごとの変化の様子をとらえ、そこから子どもの発達の実態やその道筋をさぐることとした。

## 結果と考察

1. 「園生活の見直し」にかかわる結果

これまでの園生活を振り返り、なにげなく当たり前のこととしてやっていたけれど、子どもから見ると不自然ではないかと感じることや、大人の都合にあわせていたと反省することなどを含め、園生活全般について幼児教育の基本にたち返り見直した。いろいろな場面の子どもの様子を観察し、その姿から「今、この子どもには何が育とうとしているのか」を見取り、「大人から見た望ましいあるべき姿に子どもを合わせるのではなく、一人一人の子どもの発達に寄り添い、その発達をより助長できるような園生活を」と願い見直しつつ改善を重ねた。

### 事例1. 登園時刻

（年間を通して同じでよいだろうか）

朝の登園は子どもたちにとってその日一日のスタートである。お母さんと手をつなぎ、ゆっくりした雰囲気安定感を持ち、今日の園生活に期待や意欲を持って登園して欲しいと願うものである。そのためには幼児にとっての生活リズム、また登園途上の交通状態等も把握しておかなければならない。これまで登園時間としては、9:00までとしていた。お母さんたちとそのあたりを話し合ってみると、「この時間はちょうど通勤ラッシュにかかりバスや電車の中は人が多く、そのことがきっかけで機嫌をそこね、ぐずついたり、幼稚園に行きたくないということになることもあります」と訴える3歳児の母親がいるかと思えば、「自分のことは自分ですというので、子どものやる気を大事にと思って、子どものペースにあわせていると時間に間に合わなくなることもあります」という4歳児の母親の声などがきかれ、園児の登園にまつわる諸々の事情や実態が浮き彫りにされた。

入園当初のこの時期に「安定感を持って喜んで登園して欲しい」と願うのであれば、登園時間そのものをもう一度考えてみる必要があることを痛感した。いろいろな試みの結果、年間を通して登園時間を一定にするのではなく、その時期その時期の子どもの実態から発達の様相をとらえ、また育てて欲しい方向に向かっての願いなどを配慮して、登園の時間を流動的に決めていくことに落ち着いた。もちろん、保育日数、一日の保育時間等については学校教育法等に定められていることであり、その範囲内での試みである。

#### 事例2. おかたづけ

昔から幼稚園の保育活動の中で、このおかたづけが大変重要な教育内容のひとつになっているといっても過言ではない。しかし子どもにとっておかたづけとは一体何であろうか。まず教師間でかたづけについて話し合ってみると、いろいろな考え方が出される。「かたづけは毎日きちんと繰り返させることにより習慣化していくものではないか。だから、使ったものや遊んだ場所は、毎日元の通りにかたづけさせることが大事である」「いや、やはり子どもの自主性を重んじるならば、子どもがどうするか見守るべきではないか」など様々な意見が出された。次に遊んだあとの子どものかたづけの様子を観察してみると、いろいろな活動の姿が見えてきた。

おかたづけにかかわる子どもたちの姿から

##### ア. 5歳女児（ままごと）6月

3人でままごとを始めようとしている。保育室の中に「ここは台所、ここは大きい子どもの部屋、ここにはコタツを置いて」などおしゃべりをしながら敷物、机、キッチンセットなどを運びだす場所作りから始める。そのことに30分かかかる。やっとイメージ通りの家ができ、役割にそってごっこをはじめようとするときに、お帰りの時間になってしまった。子どもたちは「あーあー、せっかくしようと思ったのにー」と、大変残念そうである。そして、「せっかく作ったから、明日までこのままにしておきたいなー」「おねがい、いいでしょ」と、そのままにしておく。（ときには、自分たちが意図してこのままにしていることをまわりの友達にも知らせるべく、貼紙をして意思の伝達を表示していることもある）。次の日はさっそく役割を演じてのお母さんごっこが始まる。

##### イ. 5歳男児（積木基地作り）6月

6、7人で大型積木を利用しての基地作りが盛んである。立体的に組み合わせるとどんどん大きくなり、

すごく立派な基地が出来上がる。かたづけの時間になると、その見事な基地を惜し気もなく崩しかたづけている。それを見て保育者は、「わー、こんなに立派にできているのにもったいないねー」と、言ってしまう。ところが、子どもたちは「明日はもっとかっこ良く作るからいいの」「設計図を覚えているからすぐ作れるよ」という返事をする。

ウ. 4歳女児（年中になりたてのころ、やっと補助なし自転車に乗れるようになったA子）

子どもが帰ったあと園内を見回ると、裏の灌木の茂みに2、3日続けて同じ状態で自転車がみつかる。何か意味ありげな置き方なので気を付けていると、どうもA子がやっているらしい。A子は最近やっと補助なしに乗れるようになり、4台しかない補助なし自転車を、毎日どうにかして手に入れたい様子である。知恵をしばって苦肉の策として、誰にも見つからない自分だけの場所を探し、置いているらしいことが分かった。

このことは一見「みんなのものを自分だけでひとり占めにしようとしている」のではないかと、いった意見もできるが、「物を次に使うことを予定してかたづけるといった面から見ると、主体的な意味のある経験をしているといえるのではないだろうか」、そうであるならば、このことをダメだ、いけないことだと決めつけるのではなく、この子の気持を充分認め、望ましいと願う方向（どこにでも置いたら雨に濡れたりするし、またお友達も使いたいと思っていることなど気付くようになって欲しい）に向かって指導していくべきであろう。物に対する愛着が育ってこそ物を大事にする基本的な習慣がきちんと身に付くのではないだろうか。

このような子どもたちの様子を見てみると、かたづけもひとつのきまったスタイルがあるのではなく、その遊びや場面、そして友達やまわりとのかかわりに応じていろいろなやり方があっても良いのではないかとようになってきた。みんなで使うものとして決まったところになければ困るものは、きちんとその場所に元通りにしなければならぬだろう。また、遊びを計画し遊びに必要な環境作りをやってやりおえ、「さあ、始めよう」という時におかたづけになってしまったら、なにか覆いでもして次の日までとっておくこともあっていいのではないかと。つまり片付けとはこんなにするものだというひとつのパターンを決めてそれにあうように習慣づけることではなく、生活の中で、こども自らが必要を感じてその時その場面に対応して主体的に活動できるように

援助することではないだろうか。その時保育者は子どもと共に悩んだり工夫したりして共に活動していくという姿勢でいることが大事なことである。そして、その中できれいになったことの気持良さ、きちんと入れておかなかったから見つからなかった失敗、準備しておくことと次にすぐ始められる便利さ等の体験をすることが、将来的には自分の生活を気持ちよくするためのかたづけにつながっていくのではないだろうか。

このように園生活のいろいろな場面を子どもの側にたち見直してみると、決まっていることだからとか、形を先に教えなければといった大人から見たあるべき姿に、いかに早く近づけようとしていたかが反省された。反省し見直すことにより、子どもの気持ちや内面の育ちに沿うところの、子どもにピッタリした園生活の在り方というものに少しずつ近づけたのではないかと思われる。

この他のいろいろな見直しについての実践例は本園研究紀要89並びに研究資料89を参照されたい。

## 2. 教育課程設定にかかわる結果

### (1) 日々のこどもの記録

ア. 保育案、保育実践とこどもの実態及び反省の記録 資料1, 2, 3,

イ. いろいろな場面の行動描写による記録

ウ. VTRによる記録 (略)

### (2) 週案、週の出来事や過ごし方の実態の記録

### (3) 月ごとのまとめりとしての記録

### (4) 学期毎にくくってみて

以上の記録を昭和61年度からの3年間継続し、その記録をもとに2年間、あるいは3年間の育ちゆく姿を節目ごとにまとめ、園生活のあらましが分かるように大きな柱建てをしてみたのが、表1である。しかし、これは一番大きな柱であり、2年間、3年間の大体の骨組みはわかるけれど、これだけでは保育の内容が分かりにくいといった問題点が出された。確かに、保育の経験年数が長いベテラン保育者にとっては、これだけでもその指導の方向がつかめるし、あとの細かい活動内容については、子どもの実態に沿いつつ長期短期の計画の中で子どもと共に作り出していく方が、より子どもの発達とピッタリしたものになるといえる。しかし、経験年数が短く、こどもの発達のみとおしが見えにくい保育者にとっては、計画が立てにくく、子どもの実態に沿う援助ができていくのではないかという意見が出された。そこでもう少し詳しく、骨組みに屋根や壁をつけ家の格好が分かるようにしてみた。それが表2である。

ここでは、育ちゆく方向が見えるように年齢ごとの発達の特徴的なことを年齢毎にねらいとした。だから、このねらいは到達しなければならぬところの到達目標ではなく、育っていく方向を示した方向目標ともいえる。また、発達の節目としての区切りを点線で表したのは、発達は連続的なものであり、たとえ学年の区切りでもその連続性を十分に表したいと願ったことである。また育ちの節目を大きくくくったのは、一人一人のこどもの育ちに合わせられるように、またその個性が充分認めてやれるようにと考えたからである。

こどもの姿として表したところは、実態からとらえた子どもの活動の姿であり、いいかえれば活動の内容ともいえる。それでは、活動の姿、あるいは活動の内容としたほうがよいのではといった意見もあるが、私たちは教育課程設定へ向けての編成作業をあくまでも子どもの実態に重きを置いてきた。したがって、しばらくはこのままの表現にしておきたいと考えている。

## ま と め

### 1. 園生活の見直しについて

幼稚園の教育は、生活を生活で生活へともいわれるように、まず幼児が幼児さながらの生活ができることが一番であろう。そして幼児さながらの生活とは遊びそのものが中心となった生活であろう。私たちはこの考えのもとに現在の幼稚園の生活が子どもの生活としてふさわしいかどうかについて、いろいろな面から見直し、問題点を洗いだし改善をはかってみたのである。しかし、3年足らずの研究ではまだまだ充分とはいえない。そして幼児を取り巻く社会情勢の変化も目まぐるしいものがある。子どもたちが将来のしあわせな生活のために、またしあわせに力強くいきぬくために、この幼児期にどのような生活をさせることがふさわしいのか、私たちは常に見直していかなければならないと考えている。

### 2. 幼児にとっての望ましい教育課程編成について

今回の研究では、昭和61年に入園した3年保育の子どもたちの3年間の園生活における実態の記録を元にして3年保育の教育課程を試案的に編成した。わずか36名のこどもの3年間の実態の記録である。一人一人の子どもが違うように、一人一人によって成り立つ学級の雰囲気は、その年その年によりずいぶん違うことも多い。だから、今後さらに毎年の子どもたちの実態を観察記録し、この試案と照らしあわせながら検討、修正を繰り返し一人一人の子ども

表1 3年間及び2年間の幼稚園のくらし

年令	月	幼稚園のくらし			ともだち、遊び			進級に向かって				
		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2
3 歳		← 幼稚園が好きになる →										
		おうちから幼稚園へ			幼稚園になれる			みんな4歳				
		せんせいとほくわたし			せんせいともだち			好きなあそび			いっしょにあそぶともだち	
4 歳	3 年	← のびのびと園生活を送る →										
		大好きな幼稚園			大好きな遊び			もうすぐ年長期				
		年中組だよ			いいものみつけた			ともだちといっしょ			がんばったよ	
	2 年	← 幼稚園が好きになる →										
		← のびのびと園生活を送る →										
		園のくらし			新しい生活との出会い			幼稚園はたのしいね			ともだちといっしょ	
5 歳	3 年	← 園生活を主体的に →										
		ぼくたちの幼稚園			仲間と共に			もうすぐ1年生				
		いちばん大きい組			○同じでありたい			○力をあわせて			○ひとり一人がいかにされて	
	2 年	← のびのびと園生活を送る →										
		← 園生活を主体的に →										
		進級			ぼくたちの幼稚園			みんなでやろうよ			もうすぐ1年生	
年長組だ			思いきり遊ぶ			同じでありたい (仲間)			力をあわせて ひとり一人がいかにされて			

表2-1 3年保育教育

		3 歳										4 歳									
年齢別ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>○安定感をもって園生活を送り幼稚園が好きになっていく。</li> <li>○身のまわりのことが自分でできるようになる。</li> <li>○園内の身近なものに興味や関心をもち自分なりに遊べるようになる。</li> <li>○友達といっしょに遊ぶようになる。</li> </ul>																				
	節育 ち 目 の	I 期										II 期									
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9			
	安定感をもって幼稚園生活をすこすようになる。										幼稚園が好きになる。										
子 ど も の 姿	(1) お母さんから離れて保育者や友達との生活に慣れていく。	(6) 周囲の人やものに関心をもち気に入ったものや場所で遊ぶ。	(13) 進級して新入生を迎え先輩らしく振るまい、がんばったり背伸びをしたりする。																		
	(2) 身の廻りのことや簡単な生活習慣に関する事柄は自分でできるようになる。	(7) 自分のしたいことに熱中して遊んだり友達のしていることを模倣したりしながら遊ぶ。	(14) 何にでも挑戦してみようと意欲的になり、できるようになったことを喜び、心身共に活発さがましてくる。																		
	(3) 目に入るものをあれこれ手にして遊び、好きなものや気に入ったものがみつかる。	(8) いろいろな体験を通して少しずつ生活経験が広がる。	(15) 友達と一緒に2・3日続けて遊ぶ。																		
	(4) 泥や水を使った遊びを好み感触を楽しみ思いのままに遊ぶ。	(9) 全身運動を好み、いろいろな戸外の固定遊具や移動遊具で遊ぶ。	(16) おしゃべりが盛んになり、自分の思っていることや、したいこと等、友達や保育者にも伝えるようになる。																		
	(5) 人形やペープサート等によるくり返しのある簡単なはなしを喜んで聞く。	(10) 模索しながらも自分でできるようになったことを喜び、保育者や友達に認められ、自信をもつようになる。	(17) これまでに身につけた基本的な生活習慣や態度を持続させたり伸ばしたりする。																		
	(11) 4歳の誕生日を迎えたことで、「大きくなった」、「自分で何でもできるよ」という自立心を高め進級を心待ちにする。	(18) 絵本やテレビ・ラジオのはなしや人形劇、その他の内容等の聴取にも関心が広がり喜んで見聞かする。																			
	(12) 集団生活をするのに必要な生活習慣をほほ身につける。	(19) 自然物に関心をもつ見たり触れたり採集したりするなど、いろいろなかかわり方をする。																			

課程設定への試み（試案）

歳							5 歳													
びのびと楽しく園生活を送るようになる。 受け入れ遊びを広げる。 ぶ楽しさやぶつかりあいなど、いろいろ							○これまでの経験を生かしながら園生活に主体的にかかわっていき精一杯たのしむ。 ○経験や活動の幅を広げ意欲的に取り組み、探求心、創造の欲求、活動の欲求をみだし自己充実する。 ○友達との遊びが深まり自分達の願いや思いを実現しようといろいろと試み努力する。 ○人やものとの出会いを通して相手の理解、思いやりや感謝の気持等が育つ。													
III 期			IV 期				V 期													
10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3			
自分の力を発揮しながらのびのびと園生活を送る。							友達と協力して楽しい園生活を送る。							みんなでより楽しい園生活を営む						
(20) 年長児の遊びに関心を持ち、遊んでもらったり、模倣したりしてルールや遊び方がわかり、自分達でやってみようとする。							(27) 最年長組になったことを喜び、他組の友達に気配りや手助けをしたりして積極的に行動する。							(34) 学級やグループの中で協力して遊べるようになり、お互いによさを生かしあいながら仲間意識を深め、より楽しい生活ができるようになる。						
(21) 友達との交流が盛んになるにつれ、トラブルも多くなるが、自分達で解決しようとする。							(28) 友達との交流が深まり、自分の考えを述べたり、相手の意見を認めたり聞き入れたりして遊びを展開する。							(35) 自分達の遊びによりふさわしいものをめざして、材料や遊具・用具類を柔軟に変化させ利用する。						
(22) 自己主張が激しくなり自分の意見を相手にはっきり言ったり自分の意志で行動したりするようになる。							(29) 友達と協力して遊ぶ中で場面構成を工夫したり、役割を分担したり、交代したりしながら計画的にとりくもうとする。							(36) 学級相互や異年齢の交流の中で年長者らしい思いやりや言動をするようになる。						
(23) 全体的に巧み性が高まり活発に運動し不得手なことにも挑戦してみる。							(30) いろいろな行事に参加して機敏に行動したり、責任ある行為をしたりしながら、状況に応じて対応できるようになる。							(37) ルールのある遊びに好んでとりくみ、ルールを守る・従う・公平にふるまう等、して大勢で遊ぶことを楽しみ、しだいに相手に合わせることや約束を守ることの大切さなどを理解する。						
(24) 手先が器用になりいろいろな材料を扱いながら製作遊びに意欲的になり創造性がふくらんでいく。							(31) 目標や課題をもち上達することや成功することを願って自分なりに努力する。							(38) 技能面の取得がすすみ、可能性が広がり自信をもって行動するようになる。						
(25) 楽器を奏することや歌ったり踊ったりすることに関心を持ち小グループで遊んだことを学級みんなに披露したり学級全体で同じことをやってみたりする。							(32) 動植物の飼育に関心が高まり、いろいろな体験をしながら親しみをもったり、いたわったりなど愛情をもって接することができる。また生命の大切さなど気づいていく。							(39) 文字・数・量・図形などの関心を高めたり、自然の事象の変化にも気づき、自分なりに疑問をもち調べたり確かめたりなどして知識欲を満たしていく。						
(26) 最年長になるという自覚が生まれ、がまんしたりがんばったりする自律的態度を伸ばす。							(33) 友達と一緒に（踊る、声をそろえて歌う、おはなしづくりをする等）表現活動を活発にするようになる。							(40) これまでに園生活を支えてくれた学級の友達、他組の友達、異年齢の友達、周囲の園内、お家の人々に感謝の気持ちをもつ。						

表 2-2 2年保育教育

		4 歳									
年齢別 ねらい	<p>○園生活の様子がわかり、安定感を持って生活するようになる。</p> <p>○いろいろなことに興味、関心を持ち、自分なりにやってみながら生活や遊びを広げていく。</p> <p>○友達とかかわり暮らす中で、一緒に遊ぶ楽しさ、ぶつかりあいなどいろいろな経験をする。</p>										
	保育 ち 目の	I 期					II 期				
4		5	6	7	8	9	10	11	12	1	2
		安定感を求めながら園生活にとけ込んでいく。					幼稚園が好きになる。				
子 ど の 姿	(1) 周囲の大人への依存したい気持ちを持ちつつも友達の存在に関心を示している。					(7) 園内のいろいろなものに興味関心が広がり心身ともに活発さが増してくる。					
	(2) ふとしたきっかけで友達関係が芽ばえる。					(8) 身体を思いっきり動かして遊ぶことが多くなり運動機能が伸びてくる。					
	(3) 自分の身のまわりのことは自分でやり通そうとし、できることを喜ぶ。					(9) 気のあう友達ができ、一緒に遊びをみつけたり、同じ遊びを2、3日続けて遊ぶ。					
	(4) 気に入った遊具や遊びが見つかり、熱中して遊ぶようになる。					(10) 友達がやっていること、できることにたいして「自分も同じようになりたい」という気持ちが出て、目的を持った遊びがみられる。					
	(5) 身近な動植物に興味関心を持ち、見たり、さわったりなどして遊ぶ。					(11) 運動会、園外保育などを通して、一緒に活動する楽しさを味わうとともに、集団生活、社会生活のきまりなどに気づき、守ろうとする意識がでてくる。					
	(6) 物のとりあいなどのトラブルを通して順番かわりばんこなどが必要なことに気づいていく。					(12) 絵本のおはなし、TVの人形劇など、みんなと一緒に喜んでみたり、きいたりしようとする。					
					(13) 自己主張が活発になり、言い分のくい違いなどによるトラブルがおこるが、まわりの子どもたちが解決の手助けをしたり、仲裁したりする。						



課程設定への試み（試案）

5 歳														
III 期							IV 期							
3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3		
自分を表出しながら、のびのびと園生活をおくる。							みんなと一緒によりよい園生活を営む。							
<p>(14) 友達が増え、遊びが広がり園生活への自信も出てきてのびのびと生活するようになる。</p> <p>(15) 進級への期待や年長児になったという自覚からいろいろな面で背伸びしたり努力したりする。</p> <p>(16) 友達と一緒に遊びを計画したり、必要なものを創意工夫したりなどして遊びをふくらませていく。</p> <p>(17) 友達との交流が深まる中で、意見の衝突や対立が、相手を受け入れたり、譲りあったりして遊びを展開していく。</p> <p>(18) 動植物の飼育に関心が高まり、いろいろな体験をしながら親しみをもったり、いたわったりなど愛情を持って接することができるようになる。また、生命の大切さなどにも気づいていく。</p> <p>(19) 自分が感じたり、考えたりしたことを他にも伝えたい思いや、何かに表現したいという気持ちが強くなり、ひとりで、あるいは友達といろいろな表現活動を活発にするようになる。</p>							<p>(20) 友達や仲間の存在が大事なものとなり、その中で楽しい生活をめざしてお互いに、一人一人が成長しようと努力する。</p> <p>(21) 園内だけでなく、身近な社会への人々への関心が高まり、ごっこ遊びなどへのとり入れが多様化してくる。また、異年齢との交流にも思いやりの気持ちが言葉や行動に表われる。</p> <p>(22) ルールのある遊びに好んで取り組み、ルールを守る、従う、公平にふるまうなどして大勢で遊ぶことを楽しみ、次第に、相手に合わせることや約束を守ることの大切さなど理解する。</p> <p>(23) 技能面の取得がすすみ、活動の可能性が広がり、自信を持って行動するようになる。</p> <p>(24) 文字、数量、図などへの関心が高まり、また自然の事象の変化にも気づき、自分なりに疑問をもち、調べたり確かめたりなどして知識欲を満たしていく。</p> <p>(25) これまでの園生活を支えてもらった学級の友達、他組、異年齢の友達、園内の人々、おうちの人々に感謝の気持ちをもつ。</p>							

にとって、またその年その年の各年齢児にとって、さらには学級にとって、より適切な指導のできる教育課程となるよう研究を続けなければならないと考えている。

また、時を同じくして平成元年3月には、新教育要領（平成2年4月1日より施行）の案が文部省より示された。

私たちは本園の教育課程編成に向けての実践研究の中で、この教育要領の改善に向けての基本方針等を十分に考慮し、研究してきたつもりである。

新教育要領では、幼稚園の教育課程ということについて次のように明記している。

『幼稚園の教育課程は幼稚園の生活の全体を通して第2章に示すねらいが総合的に達成されるよう、教育期間や幼児の生活経験や発達の課程などを考慮して編成されなければならない。』さらに、新教育要領で示される「内容」については『幼児が環境にかかわって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されなければならない』とある。そこで、やや早急の感もあるが本園教育課程の妥当性を検討するひとつの試みとして、新教育要領に示された「ねらい」及び「内容」との比較検討を試みた。もちろん「ねらい」や「内容」が一つ一つ切り離されたかたちで、目的的に取り扱えるものではないということは、充分承知の上で行った。つまり、本園の教育課程において「子どもの姿」という言葉で表した活動内容の中に、新教育要領で示される「内容」がきちんと含まれているかどうかをつかむために、6人の保育者が項目ごとにチェックしていった。そしてその結果を集計し一致度の高い（6人一致、5人一致）ところには「内容」が含まれていると判断した。その結果（比較検討の詳細については略し、その報告は別の機会にゆずることとする）、本園の教育課程の特徴がよりはっきり浮き彫りにされてきた。つまり、①年齢ごとのねらいと活動内容が充分関連しあってい

る、②本園の活動内容（子どもの姿）の中に教育要領に示される「内容」のほとんどが含まれている、③含まれる内容の分布から見ると、3歳児期は領域「健康」との関連が深く4歳児期は領域「人間関係」や「言語」との関連が深く、更に5歳児期は領域「環境」や「表現」との関連が深いことが見出された。これらの点についての詳細な吟味と検討は、これからさらに深めていかなければならないところである。

## 謝 辞

3年間の文部省教育課程の指定を受け本研究を進めるにあたり、特に保育の根本見直しについて理論と実践の両面から、ひとかたならぬご指導を賜りました前文部省初等中等教育局教科調査官岸井勇雄先生（現富山大学教授）、熊本県教育庁指導主事白樫静枝先生、本園元園長佐田智明先生、並びに保育実践の立場から実践資料を提供頂いた渡辺瑞穂先生、原田千鶴子先生に対しまして厚く御礼申し上げます。

## 参考文献

- ひかりのくに編 1988-1989 月刊「現代保育」-保育実践研究シリーズ-ひかりのくに株式会社  
 岸井勇雄 1988 保育のあり方をたずねて ひかりのくに株式会社  
 熊本大学教育学部附属幼稚園 1989 熊本大学教育学部附属幼稚園研究紀要89  
 倉橋惣三 1934 幼稚園保育法真諦 東洋図書株式会社  
 文部省編 1988 新教育要領講習開会説資料 大蔵省出版局  
 文部省編 1989 新教育要領案 大蔵省出版局  
 坂元彦太郎編 1965 「倉橋惣三選集」 フレーベル館  
 高杉自子 大場牧夫 野村睦子著 1988 今見直そう保育の実践 ひかりのくに株式会社  
 依田新監修：大西誠一郎 水山進吾 鈴木康平 山田英美 共著 1977 心理学実験演習IV 観察 金子書房

資料 子どもの観察記録及び考察

資料1 3年保育Ⅰ期—(1)の姿

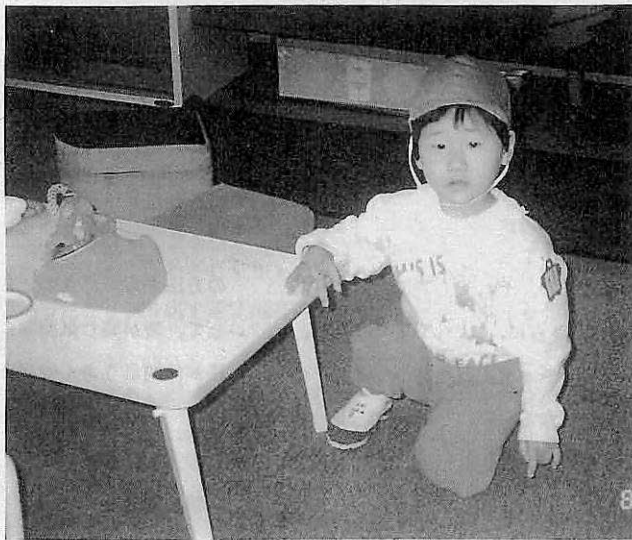
○教師と共に過ごす (Y男の場合)

- 4月28日 Y男は教師のそばから片時も離れない。
- 「友達と手をつないだら」と促してもいやがる。
  - 遊具や玩具で遊ぶことを拒否する。
  - 手を洗う時、水道の蛇口をひねらない。(勢いよく水が出るのをこわがっている。)
  - 保育室から遊戯室へと移動するとき、教師の手を強く握っている。
  - 会集で教師が他児を並べながら場所を移動すると後を追いかけてくる。教師がゆきなり君と手をつなげない時は他組の教師と手をつなぎそばに近づいている。
  - 「ママは？ まあだ？ いつ来ると？」とたえず聞いている。
  - 片付けの時、教師のすぐ近くなら、容器の中にブロックを入れてくれるが、3m位離れた所へ持っていくように頼んでも「イヤ」と拒否する。それでも「持って行って、先生、ここでまってるから」と言葉をそえると大急ぎで片付け、そそくさと教師の元に帰ってくる。

教師の考察

大人から離れることへの不安を体中で表現している。同年令の子ども達を恐れ、大人のそばに居れば安心なのである。

入園当初、母親から離れた後、不安が一杯で帰るまで泣いている富士子さん、玩具を取られたと言っては「ママー お家へ帰りたーい。」と昇降口から正門の方を見ながら大声で泣くたまきさん。不安な気持ちの表現の仕方もいろいろあるが、Yの様に大人に寄りそっていなければ不安で仕方がないという子の居ることに考えさせられる。「幼稚園の子になったんだから、もう少し我慢しなさい。」とは子どもの気持ちを思うととても言えない。ただひたすら「園生活は何もこわいことはない。幼稚園にしばらくいるとお母さんは必ず来てくれる。」という確信を自分でつかむまでは不安症候群の子ども達には差しのべられるだけの手を与えてやろう。



資料2 3年保育II期-14の姿

○遊びの様子から子どもの実態をさぐる。

○「おしょうゆやささんごっこ」の中から遊びのきっかけ、その広がりをもとめる。

毎日の自主的取り組みにおける遊びをみていると、ちょっとした刺激に遊びのきっかけがつかめたり、イメージがどんどん広がったりしていくようすがみられる。そのような中で、魚つりごっこ→しょうゆさん→水遊びへと展開していった遊びをひろってみる。

(名前は仮名)

遊びのきっかけ、広がり方 子どものとり組みのようす	教師の考察 配 慮
7/2 TV「できるかな」(浮べて遊ぶ)を見る。	●暑い中での水遊びへの広がりなどを考慮して視聴させた。
7/2 「ラッコだぞー」とはおおが大きい声でいいながら入室してくる。手にはTVと同じようなラッコのおもちゃを作ってきている。	●いつもは友だちの中であまり元気よく遊んだりする方ではないので余程得意満面の気持ちであったのだろうと察する。
●ひもをつけてひっぱってみるが、うまく行かない。くにおは棒を持ってきてちょっと押ししてみる。	●TVのようにうまく行かなかったので、自分なりにやり方をかえてためしているようである。
●しばらくしてひっぱたり、押ししたりして、TVのような遊びがくり返される。そのうち紙の部分がぬれて、はずれた。ガムテープで修理する。	●「させて」と並ぶ友達が増えるが「したい一心」からおとなしく一列に並んでいる。よくけんかがおきかないのだと不思議な気がする。
●くにおは「魚つりしようか?」というより早く色画用紙に魚を線描きし切り抜き、水に浮べた。そして、先程の棒で魚に穴をあけつきさして「つれた。つれた。」と喜ぶ。	●くにおは自分で取り入れた細い棒が釣り竿にイメージされたのではないだろうか。
(赤と緑の魚) しばらく魚つり、魚づくりが続く。棒が一本なので「かわりばんこ」それでも間に合わず「2人づつしょう。」さらに、「これですくったら。」とたかおがプラスチックの皿を持ってきて、金魚すくいのようなになる。	●魚の作り方の早いこと。とにかく早く遊びに使いたいらしい。魚の形らしいという程度である。
●「つれた魚はこれに入れとこう。」と洗面器に水を入れて横に2個用意する。さだ子	●子どもたちは自分が「早くしたい。」その解決のために、かわりばんこ、2人で、さらには、別の方法をもってきてと色々工夫している。そして、皆が同じ気持ちなので、その提示される方法が仲間によく受け入れていく。
	●この子の、思ったことをすぐ行動に移す実行力に感心させられる。 釣った魚の処置まで考えると本当に感心させられる。

- 水に長くつけているので色画用紙の魚はガラ〜りとなり、ちぎれたりするのも出てきた。水もだんだん赤くなってきた。(次々に新しい魚が入れられてはいた。)たらいのまわりの子どもたちは9人になっている。そして、かきまわすので魚の傷みぐあいも早くなった。  
「すぐグチャグチャになる〜。」
- たかおはしばらくウロウロと何かを探しているようであったが空容器からスチロールの皿を出して作り始める。さだ子もふみおも始める。
- みちおは空容器の中から卵のパックを見つけ、何を思ったか「魚やきばい。」と容器の間についた魚のをせ、うちわ替りに箱のふたを持ってきて、パタパタとおいでている。そしてとなりにいたふみおが、「ふわ〜、ふわ〜。」と言葉で言いながら手でけむりの表現をする。みちお「やけた魚はこれに入れるとパイ」「ジュ〜」この魚やき遊びが余程面白いのかこの二人に学、ゆうじろうが加わりしばらく続く。
- 魚つりの方は、スチロールの皿は確かに浮かぶ。そして、水にも強い。しかし、盛りあがらない。あとでは「これはダメ。」「もう入れたらいいかん。」になってしまい、又元の色画用紙の魚にかえてしまう。
- 水がだんだん赤くなる。魚もちぎれたのが多くなってきた。そのためか、わざとぐちゃぐちゃにし、そこから色をしぼり出す遊びが主になってきた。
- 魚やきをしていた。ひろしが「赤しょう油にしよう」と言い出し、皿に赤い水をくんだ。
- その言葉により、みんなすんなり醤油のイメージを持ったらしく色々な空容器を出し入れて並べる。並んだところでゆうじろうが「赤しょう
- これはだんだん色水やさんでも始まるのではないかと思った。しかし、口出しせず、流れをみることに徹した。
- その声があまりにも切実だったので思わず「ぬれないもの作ったら?」「何か浮ぶものないかな?」と助言した。
- 切りにくそうだがあっちまわし、こっちまわしして、いっしょうけん命に切っている。
- 家庭での生活経験やTVなどからの影響を思う。「パタパタ〜」「ふわ〜ふわ〜」の表現が面白いところのようである。何度も何度もしている。
- ここのところをみていてTが気づかされたのは、この遊びのどこが「面白いもの」となっているかが見抜けなかった点である。つまり、子どもにとっては水の中を泳ぐ。ちょっと水に「かくれている魚」をつったり、すくったりすることに、そして紙であるため適度にゆらゆらする、そのあたりがより魚らしく次々と遊びが発展していくもどったのではないだろうかと後で気づかされた。
- えのぐと違い透明感のある赤い水で本当にきれいである。その色の美しさで色出し遊びへ移っていくのであろう。感動する心が次の遊びのきっかけとなっていく。
- 自分のしている遊びとクライの中の赤い水から「しょう油というイメージがひらめいたらしい。」
- 子どもは同じものが並ぶことで、「お店やさん」のイメージを持つものだろうか、Tの見たイメージとしては、赤いきれいな水の入ったジュー

油やさんだ。」「さあ、いらっしやい、いらっしやい。」みちお「おとうさん、おかあさん方早く買って下さい。」しかし、この場にいた子どもたちはだれも買う人にはならず、せつせと並べていく。

- たくさんあるカップを全部出して並べている（プリン、ヤクルト、ヨーグルトなどの小柄なもの）  
たくさんカップに入るのでタイヤの中身が少なくなる。そこで、まなぶがバケツで水道の水を入れ始めた。
- しばらくするとゆうじろうが「あんまり入れるな！うすくなってしまう。」とどなり声を出した。そして、そのままうすくなったのをかえしていた。しかし、やがて「もうペンみんな返せ！」その声で他の子たちも一度並べたカップの中身を全部タイヤの中にかえた。

スさんのようであるが、初めの発想が続行されていくというのも面白い。

- みちおは普段あまりごっこことかに参加していないが堂にはいったよびこみに商店街の子らしい生活感をみる思いがする；
- この頃の参加者はゆうじろう、学、くにお、文男、くにひろたちであるが、内容をみていると自分の感じたことを行動に移している。まわりとの関係の中でうまく協調しあって、まさしく主体的に活動しているように見える。
- 並んだカップをみると製造順にだんだんうすくなっているのがよくわかるのである。
- ゆうじろうは自分なりに並べながらもどうしたらいいかを思考していたのであろう。そして、方法を思いつき、この言葉になったのであろう

### 資料3 3年保育II期—(13)の姿

○大きくなった気分

#### ① ちょっと我まま

- 心身共に成長してきた子ども達である。自己主張も多くなりT側（特に担任外の助手のMに）「もっと遊んでいいでしょ」とか「一生けん命遊んでるんだからいいじゃない、片付けなくても」とか強気に出たりしている。
- 担任には言えないことでも助手のMには言い合ったり、片付けをなかなかしなかったりしていた。
- K男は家で「幼稚園には何をしても叱らない先生が来た」と話している。子どもの心の内を解する時には無制限に無制約にすごしてみたいと思うのかもしれない。本音を言える相手があることはある意味ではいいかもしれない。反面担任自身の反省材料ともなった。
- 友達とのかかわりが多くなり又楽しくなると片付けの時や、集合の時がきも、いつまでもかかわっているの、次の行動へのきりかえがむずかしい。今は丁度進級したことと自分の体の成長に伴う解放感等が伴って活発で生々としている時らしい。

#### ②コントロールがむずかしい（4月末～5月初）

- 今週は園全体で集会する日が2回と身体測定があり、クラス全体と一緒に集う機会がいつもより多い週であった。ひとり一人の生活というより集団としての生活の流れの中で「個」が発揮されたり、つまずいたりする場面が見られた。
- 4月の誕生祝会ではTの即興人形げきを見る会があった。子ども達の中にはこの人形げきの響を受けてげきを始めるというようなことはな4才児の今は見て楽しんで段階であった。
- 子ども達は体も大きくなり活発化しているので互いにふざけあってプロレスごっこをしたり、いかけあったりしている内に、相手に馬のりにり、泣いているのにもかかわらず止めなかったして、結局はTがストップを入れなければコントロールできないような状態である。女兒の中に「可哀相でしょ、止めなさいよ。」と言う子もい泣き声を聞いた子がTを呼びに来ることもあつた。  
A夫は数名の子らから手足を持たれ、かかえられた。（腹部を下にして四肢をもたれた状態）保室からリズム室の方へと運ばれていく途中で床おろされ腹部をつけたまま、今度は両手をにぎられ、ひっぱって移動させられた、そばを通りか

ったTがA夫の身を案じてストップさせたが、される方もしている側も悪気はないらしい。何も意志表示をしないA夫のことを考えさせられた。痛かったり、つらかったりしたであろう時もあったかもしれないが黙ってなされるままであった。このような機会をとらえて生活の中で、自分の思いを相手に伝えるあるいは意志表示を態度に表すことの大切さを話しておいた。

- みんなと一緒にする活動になると、歩調を合わせることのむずかしい子はクラスに2、3名はいて個別指導を必要としてくる。それは、J、M子、A子、I子と生まれの遅い子どもの中に多いが、個として他の子と合わせるまでに達しておらず自分の世界から脱していない子もいる。
- クラスとしては、自発的に聞く態度にひとり一人が入れることは少なく、Tが声をかけて聞く姿勢作りをすれば、4/5までは可能である。あとは個別指導を必要としている。

日常生活の中で彼らへの指導は、Tの援助と、励ましである。友達の模倣をしたり、援助を受けたりしている姿を認めてやる。模倣することで、動き出し、自分の糧としながら少しずつ自分を発揮するチャンスづくりと考えている。

③ びっくりする程活発に（5月下旬）

1人ではしないことも2人～3人と集まればびっくりするようなことをしてしまうことがある。砂場で遊び込んで、集合せずにいつまでも自分達の世界で遊んでいる例や、みんなで約束したトイレのドア登りをくり返す例、ミルク給食や弁当の時の席のうばあい等々4歳児の自己主張の強い面や自我の強さを見ることができる。

4歳児の発達の特長がよく出ている子ども達である。

- おしゃべり好き
  - 冒険心大
  - やや反抗的でトラブルも多い
  - 模倣遊びが盛んになり人形、着替えをさせ食事をさせおんぶしてねかせる。
  - やりたがりや  
（うんていやたいこ橋や1.5m幅で高さ1.2m位の積木の上からとびおる）
  - 危険なこともやってみる  
（動物園の壁のぼり。橋の階段の端をおる。）
  - よく気づいて世話もする。  
（ミルク給食時に席のない子を世話する、当番が欠席していたら自主的に代役を務める）
- 4歳児はTが対等につきあえるおもしろい存在である。